

東下川原遺跡第5次調査

西中原1号墳第2次調査

川越市

遺跡発表会

2025

史跡河越館跡

令和7年10月4日(土) 14:00~16:30

於 川越市立博物館 視聴覚ホール

主催 川越市教育委員会 文化財保護課

遺跡の位置

河越館跡

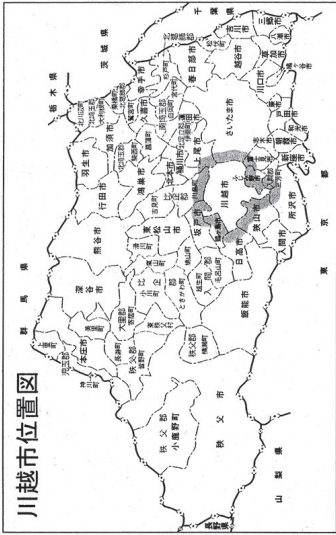
東下川原遺跡

西中原1号墳

1 : 50,000

0 500 1000 2000 3000 4000m

川越市位置図



1. 西中原1号墳第2次調査

調査地番 川越市南大塚一丁目5-3

調査期間 令和6年10月2日～12月26日

調査面積 620 m²

調査原因 宅地造成

南大塚古墳群の概要

7世紀の入間地域は、各河川の水系に古墳群が分布し、複数の地方豪族が地域内に割拠しているような状態でした。

そのなかでも、西中原1号墳は南大塚古墳群（みなみおおつかこふんぐん）を構成する1基です。南大塚古墳群は入間川中流域右岸、広い沖積低地を臨む武蔵野台地西端部に2.5kmにわたり分布します。5世紀初めから7世紀にかけて築造された27基の古墳群で構成され、さらに4つの支群に分かれます。それらの古墳の多くは直径10-30mの円墳ですが、6世紀中頃には墳長40mの前方後円墳である南大塚4号墳、7世紀初めには直径43mの円墳である山王塚西古墳が造られました。そして7世紀後半に、巨大な上円下方墳である山王塚古墳が造られました。これを最後に南大塚古墳群での古墳の造営は停止します。





図2 南大塚古墳群分布図

西中原1号墳第2次調査成果

○周溝の確認

調査の結果、調査地北側と南側に古墳の周りを廻る堀状の遺構である周溝(しゅうこう)を検出しました。周溝は直径おおよそ 30m、溝の幅は 2～4 mであると確認されました。

南側で周溝の一部が切れているところがありますが、ここは古墳の築造当時、あえて掘らず、橋状に残しています。土橋またはブリッジと呼ばれ、古墳の入り口にあたります。

○石室の検出

墳丘の中からは、横穴式石室を検出しました。石室とは、古墳に埋葬された人物を安置する部屋のことを指します。今回検出した石室は、全長約 6.2m、幅約 3m の長方形を呈しています。北側の一部で、中世以降に盗掘された痕跡がありましたが、非常に残りが良く、当時の石室の作りを研究するうえで貴重な資料となりました。

石室の壁は石を積んで作られており、石室の床面には小石が数多く敷き詰められていました。また、この床面からは2層の小石の層が確認されました。このことから、この石室は二度使用されたことが推測されます。このように追葬が行われた事例は川越市内では珍しく、代表的なものでは、川越市の場所在の市指定史跡・牛塚古墳が挙げられます。

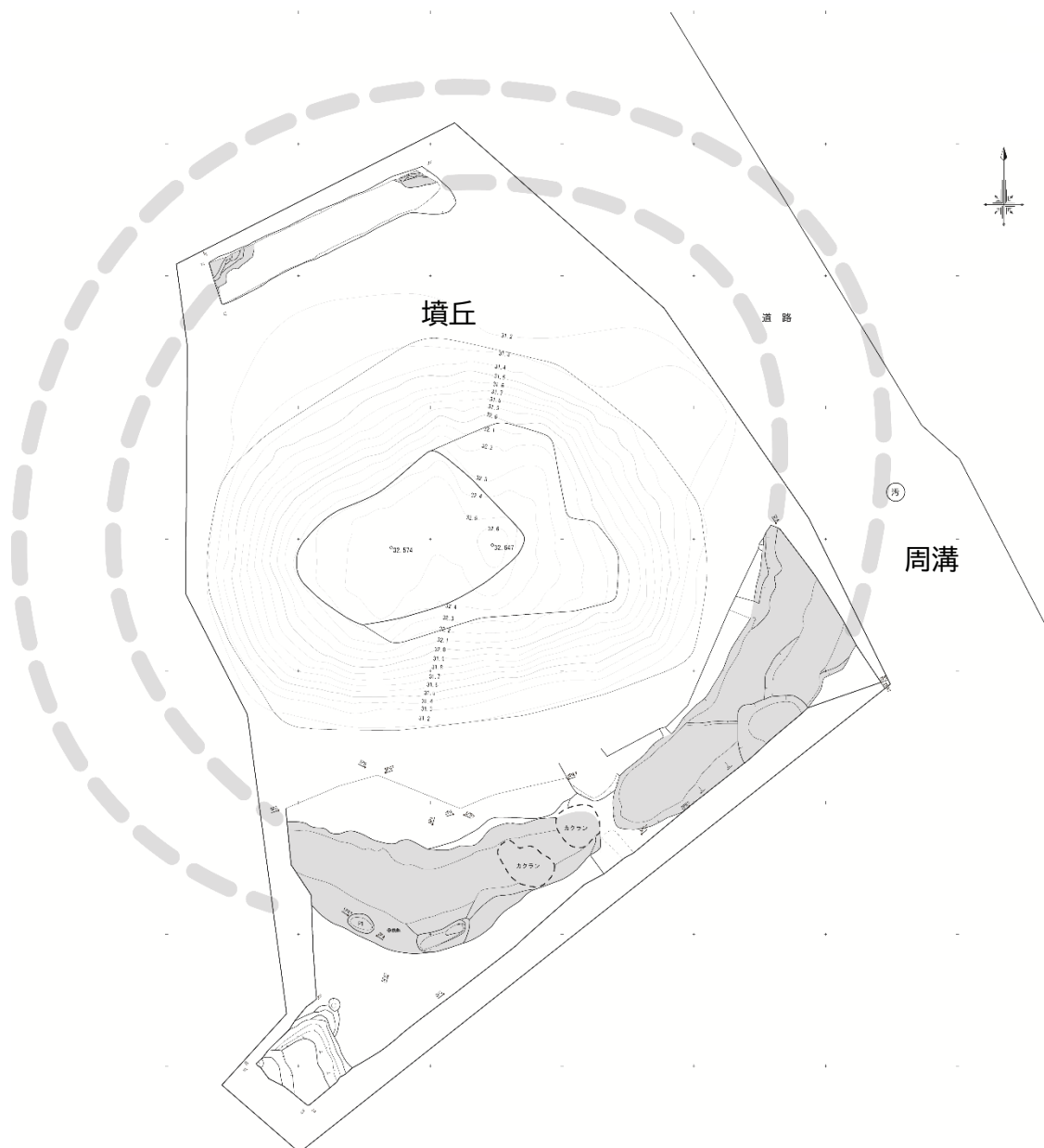


図3 墳丘の等高線図と検出した周溝の測量図を合わせた図



写真1 南西側周溝（写真中央）



写真2 南東側周溝（写真中央）

○出土した副葬品

二度目の埋葬時に、一度目の副葬品が片付けられてしまったこと、中世以降に盗掘にあったことから、石室内に副葬品はほとんど残っていませんでした。

しかし、石室の床面に敷き詰められた小石の隙間からは勾玉、切子玉、管玉、棗玉（なつめだま）など、玉類が複数出土しました。これらは、古墳に副葬されたアクセサリーの一部と考えられます。勾玉は山王塚西古墳で出土した勾玉とよく似た形をしています。また、緑色をした勾玉と切子玉は、碧玉で作られた出雲ブランドのものと思われ、南大塚古墳群では珍しい出土例です。

他にも、今回の調査の中で、盗掘の際に落としたと思われる鉄鏃や土器の破片が周溝等から出土しています。これらの遺物を見る限りでは、この西中原1号墳は7世紀前半に築造された古墳と考えられます。



図4 石室の平面図



写真3 石室検出写真（北から撮影）



写真4 石室から出土した勾玉・切子玉・管玉



写真5 勾玉出土状況



写真6 切子玉・管玉出土状況



写真7 鉄鏃出土状況



写真8 石室床面調査の様子

2. 東下川原遺跡第5次調査

調査地番 川越市大字的場 2568-2・2582-7 の一部

調査期間 令和 5 年 3 月 14 日～7 月 4 日

調査面積 703 m²

調査原因 道路建設

東下川原遺跡の概要

東下川原遺跡は入間川に解析された沖積低地に立地し、すぐ北側には低台地が広がっています。また、東下川原遺跡のすぐ南側には伝路が東西方向に走っていたと推定されており、東下川原遺跡は水陸交通の結節する位置にあったと考えることができます。また、周辺には牛塚古墳や国指定史跡河越館跡、入間郡家があったと推定されている霞ヶ関遺跡、八幡前・若宮遺跡などがあります。

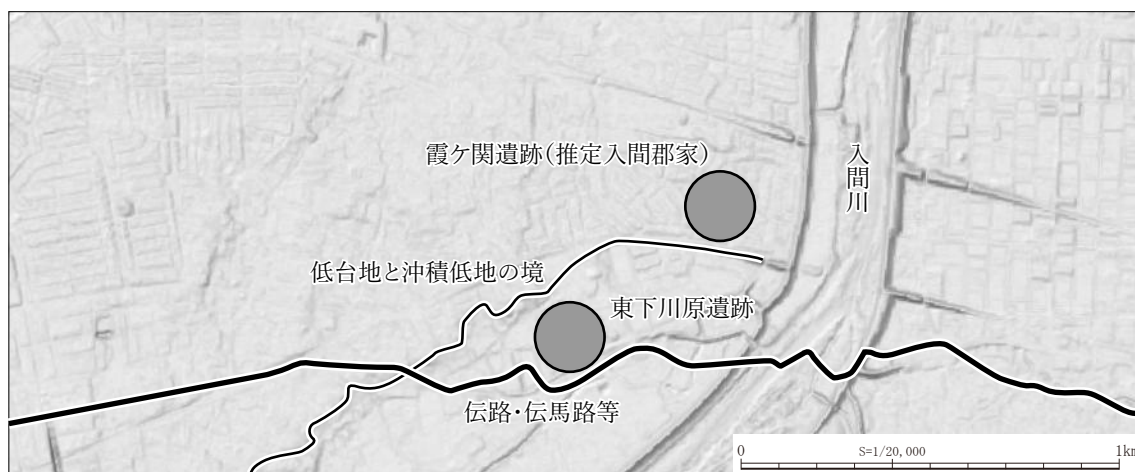
これまで 4 次にもわたる調査が東下川原遺跡で実施され、古墳時代中期から平安時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物、中世と考えられる溝などが検出されています。とくに奈良時代・平安時代に属すると考えられる掘立柱建物の中には、郡家（古代の役所）の正倉に用いられるような総柱のものも見られます。また、遺物では、南比企窯跡群産須恵器といった近傍で生産されたものに加え、遠方の湖西産須恵器や一般的な集落では出土しないような奈良・平安時代に属する瓦も多く見つかっており、遺物からも東下川原遺跡が一般的な集落ではないことが伺えます。

東下川原遺跡第5次調査の概要

今回の調査は令和 4 年度から 5 年度にかけて実施し、その結果、古墳時代後期から古代にかけての竪穴建物 10 棟、溝 9 条、土坑（緯度を含む）18 基、性格不明遺構 2 基、多数のピットが検出され、古墳時代後期～古代にかけての土師器・須恵器、鉄製品、瓦などが見つかりました。遺物の中でも特筆すべきは軒丸瓦の出土で、これによって東下川原遺跡から出土する瓦には 8 世紀代のものが含まれることが明らかになりました。

東下川原遺跡の特質

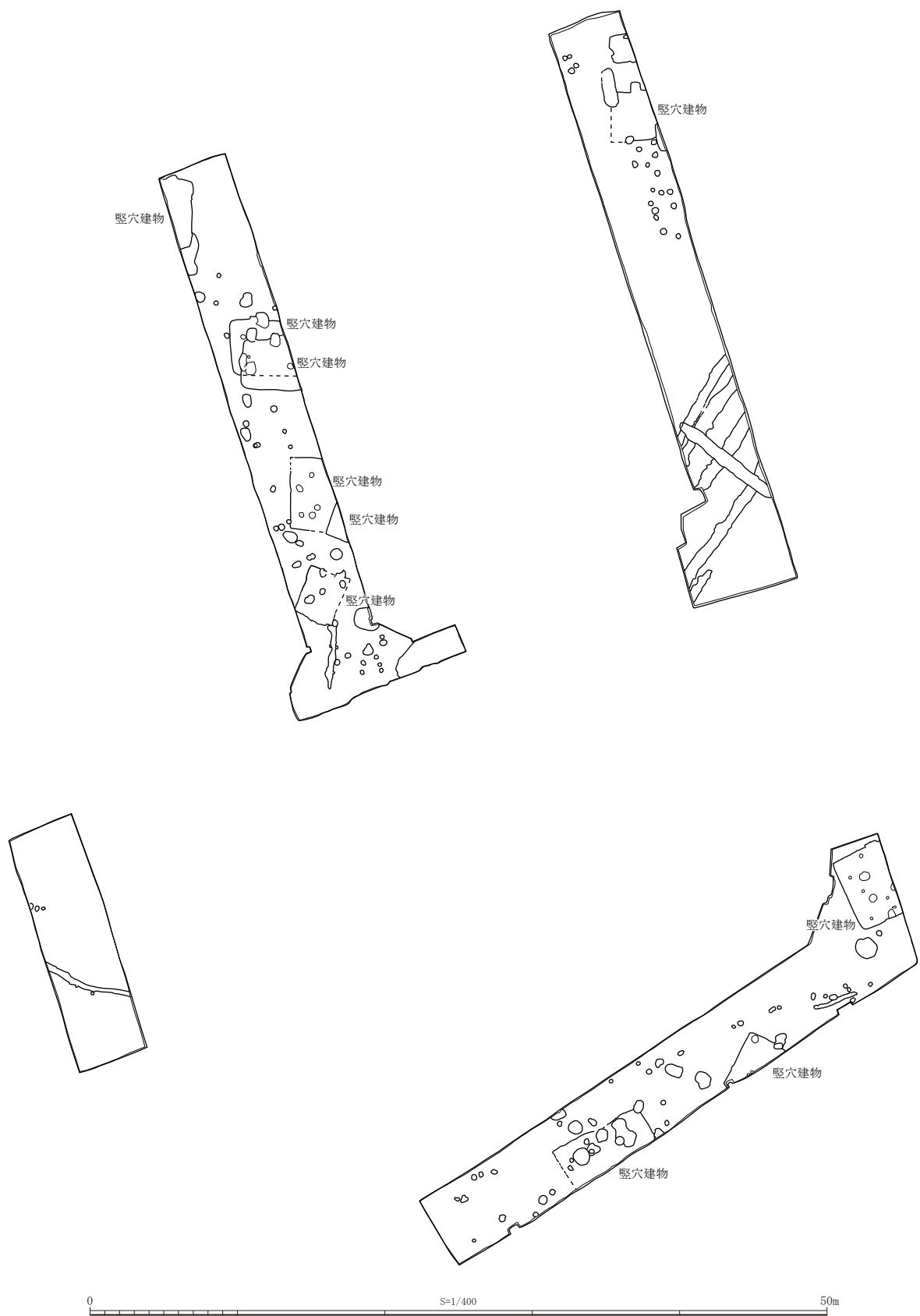
以上のように、東下川原遺跡では様々な地域から物資が運びこまれており、各地からの物資を集積する場でした。東下川原遺跡は水上・陸上双方の交通路の結節点ですから、これらの交通路を介して物資は集められたのでしょう。また、東下川原遺跡から直線距離で 700m ほどのところにある入間郡家と推定されている霞ヶ関遺跡と密接な関係にあったのではないかと考えられます。なぜなら、郡家は近傍・遠方からの物資を集積・流通させる機能を持っていますから、入間郡家は東下川原遺跡を経由して物資の集積・流通を図っていたのではないかと推察できるからです。



1図 東下川原遺跡の地理的環境(地理院地図をもとに作成)



2図 東下川原遺跡の調査地点



3図 東下川原遺跡第5次調査遺構位置図

3. 国指定史跡河越館跡

所在地 川越市大字上戸 195-1 他

指定面積 48,509.18 m²

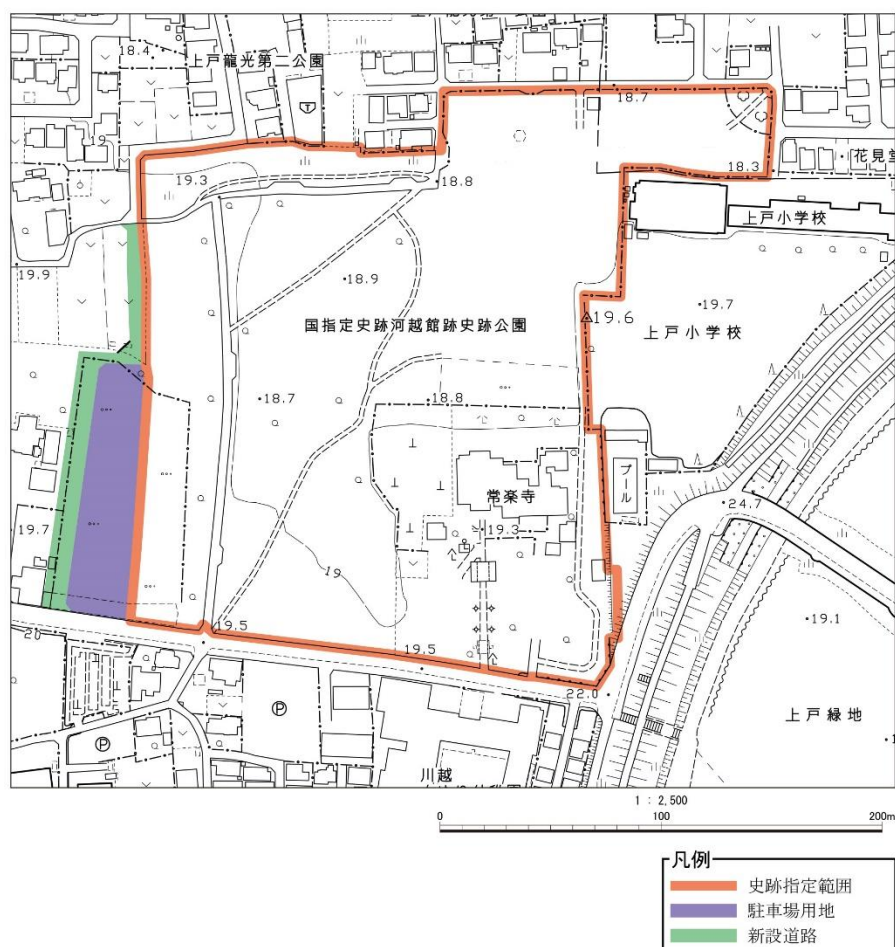
指定年月日 昭和 59 年 12 月 6 日

国指定史跡河越館跡の概要

平安時代の終わり頃（約 860 年前）、現在の川越市大字上戸・鯨井地区に造られた、武蔵武士・河越氏の居館跡が河越館跡です。

昭和 59 年 12 月 6 日、「鎌倉時代から南北朝時代にかけて有力な関東武士であった河越氏の城館の遺跡であり、中世武家政権を支えた在地領主の実態を究明する上できわめて重要な遺跡」として、国指定史跡（＝重要文化財）になりました。

現地には土塁（土を積み上げた、城などを防御するための土手）が残り、史跡の一部は史跡公園として整備・公開されています。

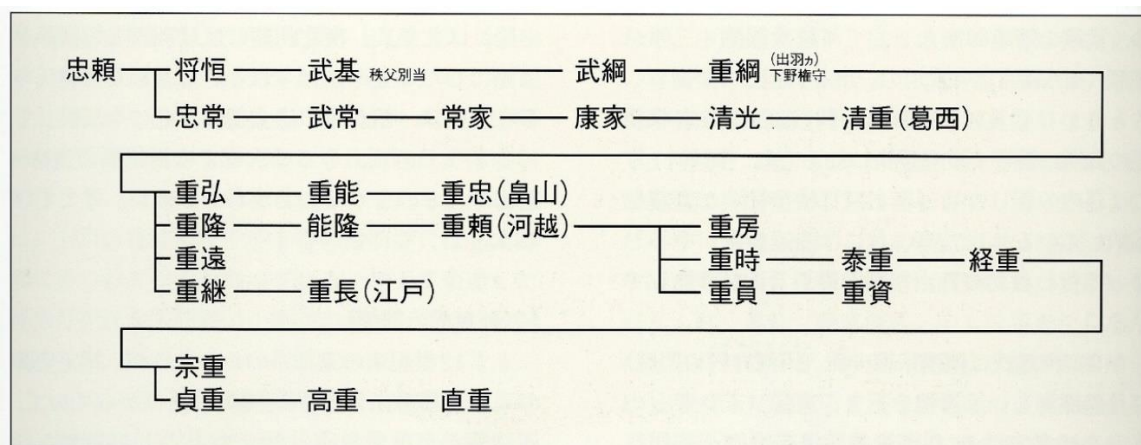


河越氏の概要

永暦元年（1160）頃、桓武平氏の流れをくむ秩父氏の一族が、河越と呼ばれる地に進出します。土地を京都の新日吉社に寄進して河越荘を成立させ、土地の名から「河越」と名乗りました（「かわごえ」のルーツ）。

河越重頼は娘を源頼朝の弟、義経に嫁がせるなど関係を強化。河越氏は後に北条氏や足利氏とも密接な関係を築いていきました。

応安元年（1368）、室町幕府の出先機関である鎌倉府に対して武蔵平一揆の乱を起こして敗北。伊勢に敗走したと伝わります。



※『千葉上総系図』を基に加筆

河越館跡の主な遺構と遺物

堀で囲まれた屋敷区画

上幅4 m、深さ2 mの堀が「コ」あるいは「ロ」状に、鎌倉時代頃の屋敷空間を囲んでいました。屋敷空間には後述の井戸跡や塚状遺構のほか、史跡外の上戸小学校へ続く境界線上をまたがって掘立柱建物が確認されています。なお、平安時代末頃の屋敷は、この上戸小学校校庭が中心（大字上戸字古屋敷）と思われ、屋敷で行われた儀式的な酒宴で使い捨てにされた「手づくねかわらけ」の中でも古いものが集中して出土します。



屋敷を囲んだ空堀



12世紀後半の手づくねかわらけ

格式ある井戸跡

2.5m四方の方形に掘り、木製の井戸側（井筒）を組み上げた井戸です。素掘りの井戸が一般的な中、河越氏の屋敷の中ということもあり、格式のある希少な規模・工法を採用しています。



木製の井戸側を組み上げた井戸



井戸出土の炭化した数珠（金箔痕あり）

塚状遺構

約6m四方の盛土の外周に浅い溝を巡らせ、盛土に石を葺いた塚状遺構の痕跡です。屋敷の西北の角にあり、先祖供養の霊廟が上に建っていたと思われます。蔵骨器として使用された常滑焼の甕（骨壺）と土製片口鉢（骨壺蓋）が出土しています。また、化粧品やお歯黒などを入れて使う瀬戸窯入子の小皿も見つかっています。



塚状遺構の周溝と落ちた葺石

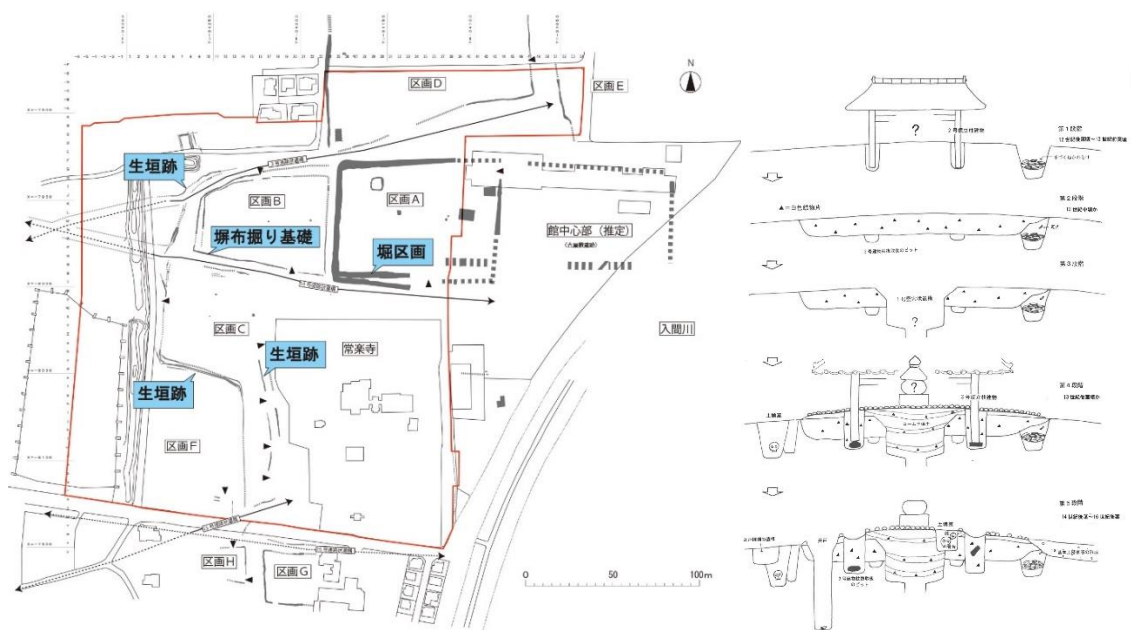


片口鉢・常滑甕・瀬戸入子

堀に囲まれた寺院？

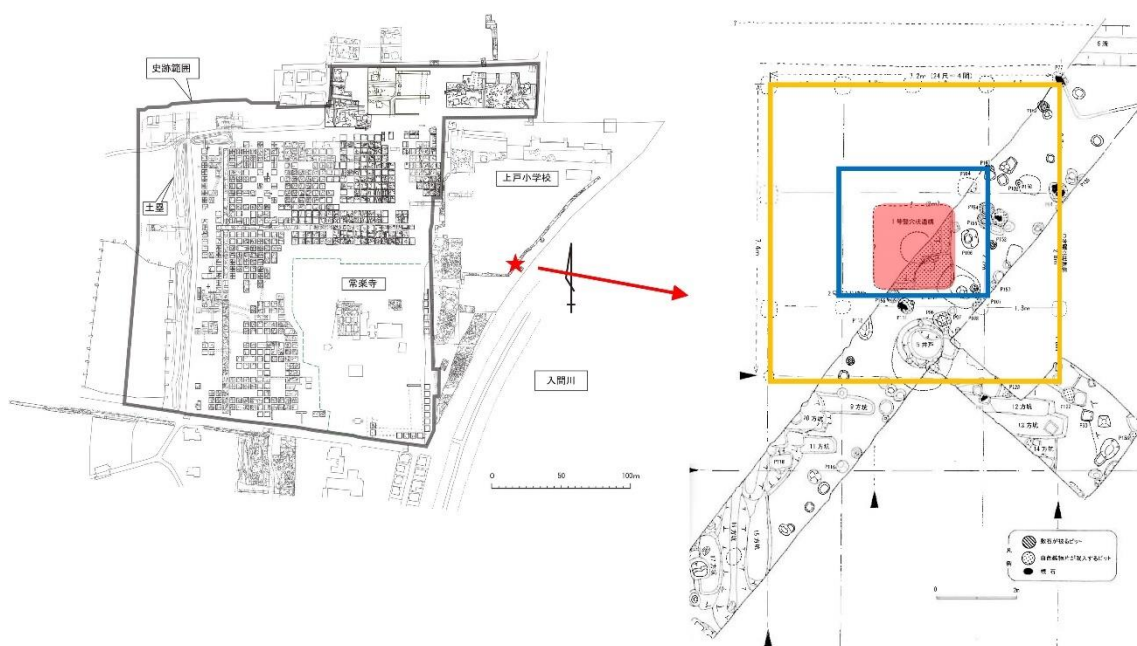
溝状に掘られた堀の「布掘り基礎」です。堀の内側は寺院または墓域として使われ、堀で囲まれた屋敷と東西に並んでいました。





これまでの発掘調査でわかった河越館跡の土地利用

下記宗教施設の変遷想像図



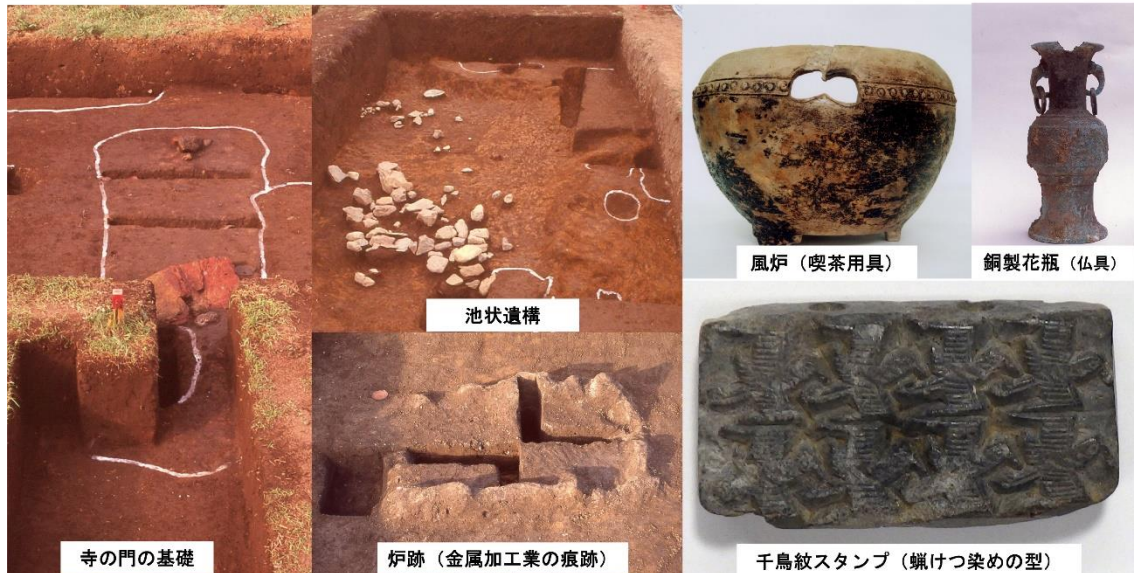
近年の調査成果の取りまとめで明らかになった、河越氏の時代の宗教施設（推定）

常楽寺に並ぶ東側（入間川寄りの「古屋敷遺跡」内）で確認。河越氏が祀った供養塔などに覆い屋をかけた施設と推測。上図★印の位置で検出されています。ここから西（常楽寺）と南が宗教的な空間であるならば、★印より北は生活空間が存在した可能性が高くなったといえます。

「都市的な場」の時代

応安元年（1368）、平一揆の乱に敗れて河越氏が姿を消した後の河越館跡は、時宗常楽寺や禅宗系の寺院が核となり、人やモノが集まる「都市的な場」として栄えていたようです。

「都市的な場の時代」 遺構と遺物



「上戸陣」の時代

明応6年（1497）頃、扇谷上杉氏の河越城を攻めるため、山内上杉氏により「上戸陣」が河越館跡に築られました。史跡に現存する土塁はこの頃の遺構と考えられています。

「上戸陣の時代」 遺構と遺物



史跡整備の今後



上図：史跡整備完了後のイメージ 下図：史跡整備後の活用イメージ（一部）



復元した道路を利用して登下校する児童



史跡での鎧着用・撮影体験

・国指定史跡として史跡整備事業の途中。令和6年度末に策定した「史跡河越館跡保存活用計画」をベースに、段階的に整備計画を検討し、常楽寺の西側の草地～土塁の西側を整備していく予定です。

参考：川越市ホームページ『史跡河越館跡保存活用計画』に
計画本編と概要版を掲載しております。



川越市 HP

歴史年表

時代区分	西暦(年)	世紀	今から何年前	歴史上の出来事・主な遺跡
縄文時代	前14000	前1	16000	三内丸山遺跡（前～中期） 加曾利貝塚（中～後期）
	前4000		6000	
	前3000		5000	
	前2000		4000	
	前1000		3000	
弥生時代	前400		2400	九州北部に稲作が伝わる 金属器の使用が始まる 吉野ヶ里遺跡（前～後期）
	前300		2300	
	前200		2200	
	前100		2100	
	0		2000	
古墳時代	100	1	1900	登呂遺跡（後期） 邪馬台国
	200	2	1800	
	300	3	1700	
	400	4	1600	
	500	5	1500	
奈良時代	600	6	1400	各地に前方後円墳が造られる 埼玉古墳群の辛亥銘鉄剣（471） 大化の改新（645） 平城京造られる（710） 武蔵国、東山道より東海道に所管換え（771）
	700	7	1300	
	800	8	1200	
	900	9	1100	
	1000	10	1000	
平安時代	1100	11	900	壇ノ浦の戦い（1185） 河越重頼の娘、源義経へ嫁ぐ（1184） 文永の役（1274）・弘安の役（1281） 室町幕府成立（1338） 平一揆の乱（1368） 応仁の乱（1467～）河越城築城（1457） 山内上杉氏、上戸に陣を張る（1497）
	1200	12	800	
	1300	13	700	
	1400	14	600	
	1500	15	500	
安土桃山時代	1600	16	400	本能寺の変（1582） 関ヶ原の戦い（1600） 川越大火（1638）
江戸時代	1700	17	300	
	1800	18	200	
	1900	19	100	
明治時代	2000	20		
大正時代	2020	21		
昭和時代				
平成時代				
令和時代				

